

ひやく　とめ　え　み　こ 百　留　恵　美　子

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第186号
学位授与年月日	平成17年3月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	和歌表現史の研究
論文審査委員	(主査) 教授 齋藤倫明　教授 小林隆 教授 仁平道明 助教授 大木一夫

論文内容の要旨

本研究は、これまでのパーソナリティ重視、特定の歌集を中心の資料とした和歌表現の研究方法を見直し、和歌表現における新たな史的研究の可能性を提示する。そのことにより、和歌表現の史的変遷を、語学的手法を用い、レトリックの変遷から解明することを目的としたものである。本研究では、レトリックの中でも特に歌語・枕詞に着目して考察する。

これまでの歌語研究・枕詞研究においては、歌語・枕詞の語義や出自を明らかにしたり、勅撰集や万葉歌人における和歌表現を明らかにしたりする限定的・個別的な研究が中心になされてきた。しかし、本研究においては、特定の資料や個人のパーソナリティなどに依拠しない、これまでとは違った新たな語学的手法によって、和歌表現の史的変遷の解明を目指す。

序章 和歌表現史の研究と方法

まず本章において、和歌表現史研究の目的と方法について論じる。第1節では、本研究が目指す「和歌表現史」ということについて説明する。第2節では和歌におけるレトリック研究の流れを概観し、問題点を指摘する。第3節では、本研究の方法と意義について、前節で明らかにされた問題について解決方法を示しながら、本研究で明らかにしようとする「和歌表現史」の意義を主張する。そして第4節では、具体的に明らかにするための方法について論じる。

第1節 和歌表現史について

本研究では、和歌表現に特徴的である、縁語・掛詞・枕詞のレトリックについて、次のような諸点を

明らかにすることを目的とし、それらを総合して得られた和歌の表現的特徴と変遷を合せて「和歌表現史」とする。

第一に歌語を中心とした表現（縁語・掛詞）の史的変遷を明らかにする。それには奈良時代から鎌倉時代までにおける表現実態を明らかにし、歌語を中心とした和歌表現の実態を明らかにすることが求められる。さらに歌語を中心とする縁語・掛詞の表出原理を解明することが必要と考えられる。

第二に枕詞を中心とした表現の史的変遷を明らかにする。それには奈良時代から鎌倉時代までにおける枕詞の表現実態を明らかにし、枕詞の用法拡大の実態を捉え、和歌表現における枕詞の位置を明らかにする必要があると考える。

第2節 和歌におけるレトリック研究の流れと問題の所在

和歌におけるレトリックについて文学的視点からの研究は多方面から行われており、その先行研究は膨大な数にのぼるが、ここでは特に、本論文で焦点が当てられる「歌語」と「枕詞」の二者について、問題点を示す。歌語の先行研究の流れから指摘した問題点はおよそ以下のような三点である。

- ① 各研究が個別的になっており、特定の語の意味やその変遷を明らかにしようとするものによって占められている。
- ② 文学的考察には歌語を体系的に捉えるという観点がみられない。
- ③ 語学的考察においては、散文と比較することによって「歌語」を指摘することに重点が置かれ、「歌ことば」としての表現性を明らかにするに至っていない。

文学的考察では歌語・歌ことばの史的変遷を貫く大きな枠組みが見られない。また、歌語の和歌における表現性についての分析は、精緻であるが、体系的であるとはいいがたい。語学的考察では、日本語の語彙史のなかに歌語を位置付けることが可能であるが、歌語を歌ことばとして捉えていない。文学的、語学的考察は相互補完されるべきであり、歌語・歌ことば研究を新しい方法と観点によって捉えてゆく必要があると考える。

次に、枕詞の先行研究でみられた問題は次のような点である。

- ① 従来、枕詞研究は枕詞のみが分析対象となり、枕詞の使用が和歌表現に対してどのような意味を持つか十分に論じられてこなかった。
- ② 枕詞を他のレトリックとの関わりで捉えるなど、相互関連的に捉える方途が欠如し、枕詞の用法の変化に伴う新しい枕詞の生成などの考察が遅れた。
- ③ 上代から中古への史的変遷のみに焦点があたり、それ以降を考慮して考察したものは殆ど見られない。

枕詞研究では、枕詞そのものに考察の焦点が当てられる傾向があり、一首の表現との関わりにおいて捉えることが不十分であった。また、枕詞の史的変遷を捉え、枕詞の発生・発展基盤を捉える方途が示されていない。枕詞研究においても新しい方法と観点によって捉えてゆく必要があると考える。

第3節 研究の意義と方法

ここでは、本研究で行う語学的手法の理論的背景を示し、語学的手法の有効性を主張した。和歌のレトリックを歌語のみや掛詞のみといった単体の表現として捉えるのではなく、レトリックによる複合体の表現として和歌表現を捉え、分析する、つまりレトリック和歌表現を相互関連的に把握するという方途は、歌語と枕詞の先行研究にも示されなかった。そこで本研究では、和歌表現の史的変遷を捉えるために、これまでとは異なった視点からの新たな語学的手法が必要であると考え、このような手法

によって和歌表現の史的変遷を捉えることが、これまで限定的であった和歌表現へのアプローチの方法を広げ、和歌表現を多角的に追究することを可能にすると主張した。

第4節 方法論

ここでは、新たな語学的手法によって相互関連的分析を行い、和歌表現の史的変遷を明らかにする具体的方法を示した。ここで示される方法によってこれまで相互関連的にとらえることが難しかった和歌表現の史的展開が解明されたと考える。

まず第一部において和歌表現を論じる際に用いる語の概念領域という視点について具体的に説明し、この方法の有効性を示した。

歌語を中心として共起する一連の語彙の一部は、縁語や掛詞のレトリックとして用いられる傾向がある。そこで和歌の中心となる語（歌語）がどのような語と共起しているかを調べ、共起する語の現れる意味を《人》域・《場》域・《属性》域の三つの領域に分け、ある時代における語の共起関係を明らかにする。そのことによって、歌語のもつ意味的（概念）ネットワークを明らかにし、その変遷をたどる。このネットワークの広がり概念領域と呼び、この概念領域の広がり方とその変遷を分析することでレトリックの変遷からみた和歌表現の史的展開を明らかにすることが可能となる。

また、第二部において枕詞の変遷から和歌表現の史的展開を追究するために、枕詞の定義を確認した。その上で、枕詞の変遷を捉えるために被枕詞に着目し、枕詞が和歌の表現に組み込まれる様相を明らかにする必要性を主張した。

被枕詞は上代の枕詞のような初原的なものであっても、歌の主想に直接的に関与し、一首の表現に関与している。また中古以降の和歌においてはいうまでもなく、枕詞と被枕詞の双方が歌の主想に関与することが多くなっていく。また、第二部で詳しく考察することになるが、枕詞は中古以降になると被枕詞の種類を増やし、用法を広げることがある。そこで、枕詞の分析には被枕詞からみた用法の広がりを検討してゆくのが有効であると考え、被枕詞に着目する方法で、史的変遷から見た和歌表現史を検討することとした。

第一部 概念領域と和歌表現史

第一部では、上代は『万葉集』、中古以降は私家集を主な資料とし、歌語を中心とする語の概念領域から見た和歌表現の史的変遷を明らかにした。

和歌がさまざまなレトリックを駆使した韻文であることをふまえると、レトリックに着目した和歌の史的展開を描くことも可能であるといえることは序章で指摘した。しかしながら和歌のレトリック展開については未だ具体的、体系的にとらえられておらず、言語研究の視点から和歌のレトリックの展開、すなわち和歌表現史を明らかにしていく必要があるといえる。

第一章 「衣」の概念領域と和歌表現史

本章では、概念領域の視点から「藤衣」「夏衣」「唐衣」における「衣」の和歌表現の史的変遷を明らかにした。

「藤衣」は上代から見える語である。「藤衣」は概念領域では《人》域に多く語が見られた。それは「喪」の周辺から発生する心情を喚起させる語であったからと考えられる。しかし平安初中期では美しい衣のことを指す場合もあった。また「藤ぎぬ」は散文に多く見られ、「藤ごろも」は和歌に多く見られることから、使い分けがあったと考えられる。院政鎌倉期には概念領域に新しい語が見られることか

ら、新しい表現が生まれ、歌に詠みこまれていたと考えられる。また鎌倉中後期になると、《場》域の語が多くなることから、叙景を用いて、歌から得られる叙情性を表現するようになったと考えられる。

「夏衣」は平安時代に入ってから見られる語である。「夏ぎぬ」「夏ごろも」の読みが散文、和歌双方にみられた。これは漢詩から受容された語と考えられた。その概念領域も《場》域の語が多く見られる傾向があり、和歌の表現も、夏という季節の美しさや風の涼しさなど漢詩に見られるようなものであった。

「唐衣」は「唐ぎぬ」は散文、「唐ごろも」は和歌というように使い分けが見られた。「唐衣」のニュアンスは「上等で美しい衣装」というもので、この衣装に対するあこがれは概念領域の《人》域にみられた語の多さから明らかとなった。「唐衣」は概念領域では、平安初中期に交差域に多く見られることから、掛詞の用法が発達していたことを示す。院政鎌倉初期では《人》域と《属性》域の交差域が拡張していた。ここから、「唐衣」がレトリックで多く使用され続けていることが分かった。鎌倉中後期になると《場》域と《属性》域の交差域が広がっていることから、和歌表現は情景を歌うものに変化していることが明らかとなった。

第二章 「竹」の概念領域と和歌表現史

本章では、概念領域から見た「竹」を中心とした和歌表現の史的展開を明らかにした。

上代の「竹」の概念領域は、交差部位に位置する共起語彙が見られないことが特筆される。それは、「竹」歌が实景に即した直接的な表現となっていたことを示す。また平安初中期では、概念の交差域に語が現れてくるようになる。それは、「竹」歌に掛詞が使用されるようになったことを示す。そのことにより、「竹」歌には複数の文脈が生じ、心情と叙景との両方を表現できるようになった。また院政鎌倉初期では、「竹」の概念領域の《場》域に属する語が増加しつつあり、平安初中期に比べ、《人》域の概念が減少し、《人》と《場》の交差域の概念が増えていた。つまり「竹」歌は情景描写を中心にして、歌に心情を込めるように変化したと考えられる。そして鎌倉中後期では、《人》域の語が減少し、《場》域の語が最も増えることから、「竹」歌は直接的な心情表現ではなく、心情を余情として醸し出す表現が多くなることが明らかとなった。

第三章 「霧」の概念領域と和歌表現史

本章では、「霧」を中心とした概念領域から見た和歌表現の史的展開を明らかにした。

「霧」は《人》域と《場》域に偏る傾向だった上代から、各交差域に語が位置するようになる平安初中期、新しい語が概念領域にみられた院政鎌倉初期、そして《場》域の語が多くなった鎌倉中後期と、概念領域が変化している。この変化は、和歌表現が上代の直接的描写から平安初中期の情景と心情の二面を表す表現に変化し、院政鎌倉初期には新しい表現が「霧」とともに詠みこまれ、鎌倉中後期には情景を詠みながら一首全体を心象化し、歌の余情を醸し出す表現へ変化するということである。

第二部 枕詞のレトリックと和歌表現史

第二部では枕詞の変遷から、和歌表現の史的変遷を明らかにした。枕詞は一般的には固定的であり、平安時代以降、衰退・形骸化するとされている。しかし実際は、枕詞は時代の要請にあわせ、一首の表現に適合するよう、その用法を変化、拡大させていく。その一方法として歌の主想に直接的に関与する被枕詞を交換・共有し、表現を多様化させるというもの、また、縁語の共起によって新しい枕詞をつくるという方法をとる場合もある。このような用法の発展が和歌表現の史的変遷と密接に関わっていることを明らかにした。

第四章 「春」と「霞」における枕詞のレトリックと和歌表現史

本章では「春」と「霞」を構成要素とする一句が枕詞の用法へ変化する時期を明らかにし、枕詞としての用法の広がりとその変遷を被枕詞に着目して考察した。

枕詞「春霞」「朝霞」は平安時代に入ると被枕詞として「たつ」を導くようになる。「霞立つ」という表現は上代からみられるが、「たつ」が被枕詞として枕詞に導かれるようになるのは、平安時代に入ってからである。それは、「霞」との意味的な繋がりが平安時代初中期に強くなったためだと考えられる。院政期・鎌倉時代になると被枕詞が増加するだけでなく、枕詞「春雨の」の被枕詞だった「ふる」が枕詞「春霞」の被枕詞になるなどのように、被枕詞の交換によって用法を拡大し、表現を多様化するものがみられるようになる。

第五章 「弓」における枕詞のレトリックと和歌表現史

本章では、「弓」を構成要素とする枕詞の用法の発展のプロセスと新しい枕詞の発生基盤を、被枕詞の増加と被枕詞の交換・共有という視点から記述し、その変遷を明らかにした。

「梓弓」において、被枕詞「はる」は上代から見られたが、院政期になると同音で掛けた「おしてはるさめ」という被枕詞が使用されはじめる。被枕詞「おしてはるさめ」は院政期に枕詞「白真弓」の被枕詞として使用されはじめ、鎌倉中後期には、枕詞「梓弓」に同音の「おす」という新しい被枕詞が形成され、被枕詞の交換・共有による枕詞の用法の広がりが確認された。

また、枕詞でないものから枕詞へと変化した過程を「弓張りの」「たつか弓」等の五音節句と「安達の真弓」「信濃の真弓」の七音節句についてみた。その結果、縁語というレトリックを用いることによって表現が枕詞へ近接することが明らかとなった。

第六章 「露」における枕詞のレトリックと和歌表現史

本章は和歌表現の史的展開の一端を解明するために「露」を構成要素とする枕詞の史的展開を明らかにした。上代から「露」は枕詞の構成要素としてみられるが、時代を経ると被枕詞にもなり、枕詞のレトリックにおいても、特に枕詞と被枕詞において意味的なつながりが強い歌語であった。

被枕詞「たま」を導く枕詞は、枕詞「朝露の・白露の・おく露の」である。「露」を構成要素とする枕詞が被枕詞「たま」を導き出すのは院政期からである。被枕詞の「たま」が掛詞によって多様化するのは鎌倉時代であり、「たまたま」や「たまくら」などの語が見られるようになる。これは意味的なつながりで用いられていたものが、それを超えて音によるつながりで用いられるようになったと考えられる。さらに院政期になると「たま」を構成要素とする枕詞が、被枕詞として「露」を導くことが明らかとなり、新しい枕詞の創作に被枕詞が用いられる様相が明らかとなった。

第七章 「竹」における枕詞のレトリックと和歌表現史

本章では、「竹」を構成要素とする枕詞の用法と表現の発展のプロセスを、被枕詞の増加と被枕詞の交換・共有という点から記述し、その変遷を明らかにした。被枕詞を交換・共有することによって、被枕詞を増やし、表現を多様にするという方法は、「弓」を構成要素とする枕詞などの用法の拡大と同じである。しかし「竹」を構成要素とする枕詞は、「弓」のような上代から徐々に変化した枕詞ではなく、「竹」の歌語化によって平安時代に新しく作り出された枕詞であると考えられる。そのため、他の枕詞と異なる様相を示す「竹」を構成要素とする枕詞について詳しく検討した。

「竹」単独の表現性は、上代から平安時代にかけて、叙景で用いるものから掛詞を用いた複数文脈で用い

るものへと変化する。このような「竹」単独の表現性の変化は「竹」の歌語化ということができる。これにあわせて「竹」を構成要素とする枕詞の表現性も変化し、枕詞の構成要素となる「竹」の歌語化が「竹」を構成要素とする枕詞を一斉に成立させる様相を指摘した。また枕詞の用法の広がりという点においても「竹」の歌語化が縁語を共起させ、その縁語を被枕詞として用いる様相が明らかとなった。また被枕詞を交換・共有して被枕詞を増加し、表現を多様にすることが明らかとなった。

終章 和歌表現の史的展開

本研究は、和歌における中心的課題のひとつといえる和歌表現の史的展開の実態を和歌のレトリックからみた表現の相互関連的視点、和歌の歴史的展開を考慮する通時的視点から、語の概念領域（縁語・掛詞のレトリック）の史の変遷と枕詞の史の変遷の考察を通じて明らかにしたものである。

本研究は、このように、相互関連的・通時的側面から、立体的・総合的に、さらには和歌表現について史的に究明がなされている点に特徴と意義がある。ここに、以下、本研究の到達点をまとめれば、次のようになる。

まず、巨視的に和歌表現の史的展開をまとめれば、以下のようになる。

- ① 上代の歌は情景描写、もしくは直接的な心情描写が行われ、情景と描写はどちらか一方のみ、もしくは交互に詠まれ、歌の表現は単線描写となっている。
- ② 平安初中期になると複数文脈の形成が行われ、情景と心情の両面を同時に表現するように変化する。それは歌の主旨に従ってレトリックを用い、二つ以上の文脈を形成するからである。
- ③ 院政鎌倉初期の和歌は平安初中期にみられた複数文脈を使用しつつ、新たなフレーズを作り出すなどして新しい表現を模索している時期と考えられた。
- ④ 鎌倉中後期になると、それ以前に見られた複数文脈の表現と異なる様相がみられた。和歌の描写は複数文脈を使用しつつも情景が中心で、心情を表すことばを詠みこまずに、一首全体に心象風景を示して余情として残すというよみ方になった。

以上は、いずれも、和歌表現の動態を示すものであり、特に時代ごとの特徴にうかがえる変化の実態は、大きくは和歌全体の表現特徴や和歌の本質に関わってくる重要な点であると言える。

また、以上の全体の傾向を踏まえ、さらにそれを要素別に見るならば、以下のようになる。

まず語の概念領域という観点からみた和歌表現の史的展開をみると以下のようになる。

- ① 上代では歌語となる表現の中心語は、概念領域の交差域に位置しにくい。それは上代の和歌表現が掛詞として用いられることが少なく、表現として情景に用いることが多いからである。
- ② 平安初中期では交差域に位置することが多い。それは掛詞を用いることにより複数の文脈を形成するようになるからである。
- ③ 院政鎌倉初期ではそれまで見られなかった語が概念領域に現れ、和歌の新しい表現を作り出すようになる。
- ④ 鎌倉中後期では、《場》の領域に位置する語が多くなる。《場》域の語は情景を表すものであるため、描写自体は情景であるが、一首に余情を残して心情を表すようになるといえる。

次に枕詞における和歌表現の史的展開についてまとめると以下のようになる。

- ① 上代では枕詞の用法は数の限られた特定の語を導き、固定的である。「弓」のような上代から縁語を被枕詞に導くようなものは少なく、多くの枕詞が数の限られた特定の被枕詞を導いていた。
- ② 平安時代になると、枕詞の構成要素となる語（歌語）と、一首にそれに関わるような縁語が共起しだし、枕詞と被枕詞が縁語を含みながら歌に一連の流れを形成するようになる。そのながれは複

数の文脈を形成することが多い。また、同じ構成要素を持つ枕詞は、縁語を被枕詞としたり、被枕詞を交換・共有するなどして被枕詞の種類を増加し、表現を多様にする。

- ③ 鎌倉時代になると、被枕詞を増やす際に、同音の掛詞を利用して新しい被枕詞を作る傾向が認められた。平安時代では枕詞の構成要素となる語の意味的関連性があるものが被枕詞となる傾向があったが、鎌倉時代になると、意味的関連を超え、音を介して異義語を導くようになる。

いずれの要素を見る場合にも、まずは実態（和歌のレトリックの使用実態）を精確に把握し、その究明のためのしかるべき分析方法を見きわめ、考察を行ったつもりである。それにより、これまで明らかにされてきたことをさらに発展的に補う点、従来の研究では視点・分析の行き及ばなかった点等が、上記の諸点のように明らかとなった。

今後、さらに補充点・発展的に追究すべき課題を挙げるとすれば、以下のような点があげられよう。

- ① 表現の中心となる歌語や枕詞は本研究で取り上げた以外にも数多く存するため、その考察を積み重ねる必要がある。つまり和歌表現の史的展開を明らかにするためにはさらにレトリックの実態を把握する必要があると考えられる。
- ② 本研究は名詞を中心に考察した。和歌表現の実態を把握するためには、動詞や形容詞などの用言を中心とした考察が不可欠であるとする。

この各々について研究を深め、本論で得た知見をさらに発展・展開させるならば、本研究は、和歌表現の史的変遷解明への大きな礎となるであろう。中でも、用言における和歌表現の史的展開は伴う課題も多く、文法的視点なども必要となり、文学的・語学的に充実させた形での調査・検討が肝要である。

論文審査結果の要旨

本論文は、上代から中世にかけての和歌表現の歴史を、とくに歌語及び枕詞という和歌のレトリックに焦点をあてて明らかにしたものである。本論文は、序章及び結論に相当する終章の他、本論2部7章からなる。

序章においては、本研究の目的と視点・方法そして意義が述べられる。これまでの和歌表現の研究は膨大な数にのぼるが、和歌のレトリックの変遷を通じて和歌表現の歴史を組織的に描いた研究は、これまで十分であったとはいえないことを示し、和歌のレトリックを中心においた和歌表現史研究の視点について論じている。

第一部は、和歌における歌語のイメージを概念領域という視点、すなわちその歌語が表す意味と、その歌語に共起する語彙の広がりによってとらえようとしたものである。そして、その歴史的な変遷をとらえることで、上代から中世にかけての和歌の表現の変化をとらえようとした。歌語のもつイメージを主観的・直感的にとらえるのではなく、概念領域という視点から、歌語とともに用いられる語彙がどのような意味分野に広がっているかを客観的に示しつつ、歌語のもつイメージの広がりとその史変遷をとらえようとしている。第一部の各章においては、いくつかの歌語に着目し、その語を中心とした和歌表現がどのように変遷するかをそれぞれ描いている。また、それを通じて、和歌表現の歴史的変遷大きな傾向をつかむことも試みた。

第一章では、「衣」を表現の中心とする和歌表現の変遷を、「藤衣」「夏衣」「唐衣」の各語に着目して明らかにした。各語の意味的特徴及び使用される文体的位相を明らかにしたうえで、概念領域の視点をととして詩的イメージの変遷を論じた。

第二章では、歌語「竹」を表現の中心とする和歌表現の変遷を明らかにした。「竹」の概念領域を分析し、その表現を解析した結果、上代には、歌語「竹」は实景に即した直接的な表現であるが、平安初中期には、「竹」歌は掛詞が用いられることにより複数の文脈が生じ、心情と叙景との両方が同時に表現されるようになったとする。さらに院政鎌倉初期には情景描写のなかに心情を込めるような表現に変化し、鎌倉中後期では心情を直接的に表現せず、余情として示すようになるという和歌表現の変遷を明らかにした。

第三章では、歌語「霧」を表現の中心とする和歌表現の変遷を明らかにした。「霧」の概念領域を分析し、その表現を解析した結果、上代の情景あるいは心情の直接的描写から、平安初中期に情景と心情の二面を同時に表す表現に変化し、新しい語彙が「霧」とともに詠みこまれる院政鎌倉初期を経て、鎌倉中後期には情景を詠みながら一首全体を心象化し、歌の余情を生み出す表現へ変化するととらえた。

そして、以上の分析を通じて、和歌表現の史的変遷の大きな傾向として、次のような点を明らかにした(終章)。すなわち、上代の歌は情景描写または直接的な心情描写がおこなわれる。平安初中期になると、掛詞を巧みに用いて一首のなかに複数の文脈を形成し、情景と心情の両面を同時に表現するようになる。そして、新たな語彙を用いるなど新しい表現を模索する院政鎌倉初期を介し、鎌倉中後期には、複数文脈をなしつつも情景を中心に描き、心情は余情として示すという詠み方になった。

第二部は、枕詞の変遷を通じて和歌表現の史的変遷について検討している。枕詞は一般的には固定的であり、平安時代以降、衰退・形骸化するとされてきた。しかし実際には、枕詞は和歌のレトリックとしてよく機能し、その用法を変化・拡大させていくことを見いだした。そしてこの変遷の詳細をとらえるために、枕詞のかかる先、すなわち被枕詞に着目した分析をおこなった。第二部の各章においては、枕詞の中心となる語をいくつかとりあげ、枕詞が和歌中でどのような機能をはたし、またどのように変遷するかをそれぞれ描いている。

第四章では、「春」と「霞」を構成要素とする句が枕詞へ変化する様相を明らかにした。これらの句が枕詞になるのは平安時代で、それは「霞」と被枕詞になる語との意味的なつながりが平安時代に強くなったためだと考える。また、院政期・鎌倉時代になると被枕詞が増加するだけでなく、枕詞「春雨の」の被枕詞であった「ふる」が枕詞「春霞」の被枕詞になるなどのように、被枕詞の共有あるいは交換によって用法を拡大し、表現を多様化させることを明らかにした。

第五章では、「弓」を構成要素とする枕詞の用法の展開過程について論じた。枕詞「梓弓」は、上代から被枕詞「はる」をもつが、平安初中期には、同音で掛けた「おしてはるさめ」という被枕詞が使用される。この被枕詞「おしてはるさめ」は、院政期に枕詞「白真弓」の被枕詞として使用される。つまり、被枕詞が共有されることによって枕詞の用法が拡大していくことを明らかにした。

第六章では、「露」を構成要素とする枕詞の史的展開を明らかにした。上代から「露」は枕詞の構成要素としてみられるが、時代を経ると、枕詞と被枕詞との意味的なつながりの強さによって、被枕詞としても用いられるようになることを示し、新しい枕詞を生み出すために被枕詞が用いられる様相を明らかにした。

第七章では、「竹」を構成要素とする枕詞の用法の展開過程について論じた。「竹」を構成要素とする枕詞は、「竹」の歌語化によって平安時代に新しく作り出された枕詞であるとする。そして、この歌語化によって縁語と共起することになり、さらに、縁語を被枕詞として用いることで、枕詞としての表現性を拡大していることを明らかにした。

そして、以上の分析を通じて、枕詞の変遷の大きな傾向として、次のような点を明らかにしている(終章)。すなわち、上代では枕詞の用法は限られた特定の語を導く固定的なものであったが、平安時代にな

ると、枕詞と被枕詞が縁語を含みながら歌意を形成するようになる。また、同じ構成要素をもつ枕詞は、被枕詞を交換・共有するなどして被枕詞の種類を増加させ、表現を多様にするようになった。鎌倉時代になると、同音の掛詞を利用して意味的関連を超えて新しい被枕詞を作る傾向が認められるということが明らかになった。

最後に、終章においては、ここまで述べ来たことをまとめ、今後このような方向の研究がますます進められるべきことを述べ、論を閉じる。

本論がこのような問題意識をもち研究を進めたのは、次のようなことを背景もつ。すなわち、それは文学的研究と言語学的研究の乖離という問題である。これは、ある意味、個別の研究分野の深化にともなうことで当然ではある。しかし、元来文学研究は、文法論・意味分析といった言語学的分析を背景にもつものであったし、言語研究もその資料は多く文芸的な言語作品を対象としてきたのであって、両者は協同すべき研究分野であるといえる。しかし、このことは個別研究の深化とともに研究理念の背景に退かされ、個々個別の分野ごとに研究を進める傾向が顕著なものとなっていた。しかしながら、少なくとも言語研究の側からは、文芸作品を文芸作品として分析することのできる方法論が見いだされるようになってきている。本論文は、そのような流れのなかで、文芸作品を言語学的な視点を通じて、文芸作品として分析しようとする試みであり、その点は高く評価されるべきものである。そして、その試みは、今後に期待すべき部分がないではないが、かなりの程度において成功しているといつてよい。

以上のように、本論文は、今後の和歌表現研究の進むべき方向性の一端を示したものであり、和歌表現史研究についてはもちろんのこと、言語研究、とくに日本語史研究におけるレトリック史研究、さらには和歌文学研究の展開に寄与するものといえることができる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。